

真摯な人間としての生き方を 教えてくれる、医療者たちの実践

生きるための緩和医療 有床診療所からのメッセージ



伊藤真美・土本亜理子 編

A5 判・294 ページ
定価 2310 円(本体 2200 円+税 5%)
ISBN 978-4-260-00653-8
医学書院, 2008

評者

川島みどり

日本赤十字看護大学

正真正銘の緩和ケアとは？

入院をしなければならない病気や手術に直面することは、それ自体が非日常的なできごとであり、当人はもとより家族の不安や当惑も大きい。まして、完治とはほど遠く、自立生活も覚束ない状態のもとで退院を迫られるのが、今日の一般的な医療の姿であり、医療難民とかがん難民といった言葉さえ生まれている。一方、3人に1人ががんになり、2人に1人ががんで死ぬという時代。「がん対策基本法」の制定を待つまでもなく、緩和医療・ケアは人々の強いニーズでもある。

また、人生の終末をどのように迎えるか、どこで迎えるか、施設か在宅かをめぐる葛藤は、個人の思いを超えて深刻である。自身の経験から、

緩和医療とか緩和ケアという言葉を知った際に、これを利用する患者や家族の思いと重なる習性が身についた。診療報酬が先導した形で始まった病院の緩和医療・ケアの内実は、多くの人々の期待にフィットしているとは思えない。がんだけを取り上げてみても、積極的な治療を実施している間は入院できない制約があったり、包括医療報酬によって、患者や家族のニーズに沿ってもらえない実態もある。緩和ケアは選択の時代になったというのが、当事者になってはじめて積極的に求める情報の不確かさと浅さ、選ぶ基準もなければ、選ばれる側の情報提供も不十分であると思う。

そうしたなか、単なるターミナルケアではなく、ホスピスでもなく、これが正真正銘の緩和ケアだということを、5つの有床診療所のユニー

クな活動を通して紹介する本書に出会った。目次を見れば、全国各地で緩和ケアに取り組む診療所の活動に焦点を当てたことが一望でき、「緩和ケア」のあり方を探ることへの期待がもてた。しかし、読み進めるうちに、そこにあるのは、ある目的にこだわり続けた人の人生観であり、リアルな生き方そのものであることに気づいた。つまり、緩和医療やケアに携わるそのことが、真摯な人間の生き方そのものであり、読む者は、その底に流れる感性を掬い取ることで、自分の生き方についての新たな思いを探ることができるのである。つまり、本書は、先進的な緩和医療・ケアの経験を集め、緩和ケアの将来への強い提言とともに、緩和ケアを通して現代医療を支える「人間論」でもある。

有床診療所は、戦後の医療法改定以来ずっと続いてきたが、その名称は必ずしも一般に普及しているとは思えない。だが、病人や家族にとっては物理的にも心理面でも、より近くにある親しみ深いお医者さんの居場所であり、外来から入院まで通して診てもらう場でもある。その有床診療所の規模と形をフルに活用して緩和ケアを実践されている医師らの生の声と姿をリアルに追いかけた伊藤(編者)は、自ら緩和ケアを行なっている診療所長でもある。

さまざまなスタイルを 発見した驚きの旅

現在進行中のわが国の「医療や福祉のあり方を牽引している力」に疑



間を感じ、同じ規模の緩和医療を営む4つの診療所の現状や共通点、問題点を確かめるための旅に出た。パートナーは、本書のもう一人の編者である土本(ノンフィクションライター)である。それぞれの施設の詳細な紹介は、そこでの緩和ケアの理念とそのありようとともに、そこで働く人々の喜びや悩みを浮き彫りにする。何よりも、その後に展開されるインタビューが圧巻である。評者もまた編者らの旅に紙上行き、編者の目線や問題意識に重ねて、それらの診療所とそこに働く人々を訪問しながら、登場人物の何とも言えない魅力的なユニークさに惹かれてしまうのであった。立地条件も始まった契機も多様であるのに、なぜこうも人を惹きつけるのであろうか。

共通していることは、「緩和ケア」という重いテーマを挟みながら、時に舌鋒鋭く、あるいはちょっとひねった批判さえ、淡々と気負いのない語り口でユーモアを交え語られていることである。決して平坦ではないこの道を歩んで来た実践家ゆえの

ものであろうか。語られている内容が、まさに現在進行中の大病院の医療やケアへの厳しい批判であり提言であり、IT時代の看護への反省という点で共感する部分が多くあった。医師であると同時に経営者でもある人たちは、「夢」と「経営」とのマッチングをする上でも達人なのであろう。現行制度の問題点を踏まえつつも、財政面での苦労は並々ならぬものがあるのだろうが、それさえ楽しさに転換しているようでもある。

経営と運営の責任を分離して権限を委譲する梁所長の期待と意図をしっかりと受け止めて事業を運営する師長の姿。大病院でも学びたい手法である。有床診療所は「すごく面白い」と、アイデアを個人として具体化できる芽があると徳永所長、「チェーン店ではないこだわりのあるうどん屋」という言葉は妙に説得力があった。「入院したくなるような病院、昇りたくなるような階段」をイメージしてアメニティを工夫し、「ゆっくりお疲れ入院」があると語る堂園医師は、「困っている患者さん

を泊めてあげる」のが始まりであったという。中世ヨーロッパのホスピタル発祥を思った。「聞かぬやさしさ、いわぬやさしさ」という独自の文化のなかでの家族の絆を、緩和ケアの実践に導いたのは土地医師、長田看護師らであった。

最終章では、編者の伊藤も、自らインタビューを受ける立場で自施設の活動を紹介している。そして、旅の印象として、「5つの有床診療所の類似点よりも、むしろさまざまなスタイルへの驚きの旅」、「共通点よりもむしろその個性的で多様な変化に富むありようの発見の旅」というまとめをしている。いまだ全国的に見て少数、このような医療やケアの適用を受ける人達もかぎられている。決して普遍化できない個々の診療所の特性のなかに、強いて共通なキーワードを探せば、「暮らし」「日常性」「納得」「継続」「チームワーク」であろうか。かぎられた字数では語り尽くせないドラマティックなエピソードの数々と本書の魅力を、ぜひ手に取って実感していただきたいと強く願う。

■医学書院発行の書籍ご購入は、最寄の医書専門店または医学書院販売部 電話(03)3817-5657(直通)まで。ホームページ(<http://www.igaku-shoin.co.jp>)からもお申し込みいただけます。